謹んで、故鈴木礼暁君のご霊前に捧ぐ。

塚　谷　周　次

弔辞

鈴木君、君はとうとう逝ってしまった。

君は、１年2ヵ月に及んだ禁欲的且つ意志的な闘病生活を、あっけない酷薄な死を以て閉じたのでした。口惜しい。残念でなりません。

そのぼくたちの感懐は、江戸期のある俳諧師の詠んだ、つぎの一句に代弁されているかと思います。

露の世は露の世ながらさりながら

思えば、君は、30年来の風雪を共にしてきた友であり、頼みがいのある戦友であり、人生最高の知己でありました。その君が、65歳を一期として、慌ただしく駈け去っていったのであります。ぼくは、今、君がいないという喪失感の重さにたじろぎ、戸惑い、呆然として立ち尽くすほかありません。不覚にも、泣きべそをかきながら。

鈴木礼暁とは、誰か。

君は、まず、ジャンジャック・ルソーの学究でありました。研究者とは、彼の人格形成において、研究対象からの影響を強く受けるものであります。ぼくの見るところ、鈴木礼暁というルソー研究者もまた、その例外ではありません。ルソーと云う偉大な思想家の政治哲学的核心は、人間の平等や自由を基盤とした社会構築は、いかにして可能であるかという問題意識にあります。ルソーは、社会的不平等を諸悪の根源と見なして、これを激しく攻撃しました。それ故、ルソーは、あのフランス革命のイデオローグであったばかりでなく、

現代の社会変革や革命の思想的精神的バックボーンとしてビビッドに機能し続けてきました。

鈴木君、おそらくシャイな君は即座に否定するだろうが、君は、このルソーの知的系譜に間違いなく繋がっている。君は、青春のある時期にルソーという思想家と遭遇して以来、この思想家を強力な磁場として、人間と学問を形成してきたのに違いありません。

たとえば、君といくらかでも交渉を持った人ならば、かりに次のように君を括ってみても、たれもが異口同音に首肯するはずです。

鈴木君は、組織改革にいつも積極果敢であり、学生の目線で学生たちと交わり、交友では、いつもフェアーでこころ優しい男だった、と。

鈴木君、ぼくたちはいつも常住坐臥文武百般を談論風発したものでしたね。君が発病する前でしたけれど、談たまたま中江兆民の『一年有半』に言及したことがありました。中江兆民といえば、東洋のルソーと称されたルソーの研究者でありましたが、明治の自由民権運動の有力なイデオローグでありました。

その時の話を、ぼくは鮮明に記憶しています。話柄が中江兆民の小樽や札幌居住になった時に、鈴木君、君はある構想を語り出したことがあった。ユニークな中江兆民論の構想を。是非ともそうしたらいい。ぼくは、強く勧めたことを憶えている。

これは、君が最初のオペを受けた後の話なのだが、君は、兆民も食道癌だったんだよね、と呟くように話したことがあった。それを口にした時の、何とも云えない微笑を含んだ君の顔を、ぼくは忘れることができません。羞恥と稚気は、君の大きな魅力の一つでした。

願わくばもう少しの命を、独創的な中江兆民論を紡ぎ出す時間を、鈴木君、君に与えられていたなら、どんなによかったことか。それを思うと、今更ながら、悔しさが込み上げてきてならないのだ。君の中江兆民論を読みたかったな。

わが友鈴木礼暁よ、君の想い出は尽きない。追慕止み難く、わが

心中は転た寂寥。今は只、君のご冥福を祈り奉る。

adieu mon ami !

平成21年 6 月13日